

女は仇

「世の中に、金と女は仇なり、どうか仇に巡り会いたい」という粹な言葉がある。

東西南北でなく、前後左右で地形を捉えるのは女に多いと言う。車のバックも苦手なので、すれ違いでは引き下がらない。鏡に映った顔が本当の顔で、写真映りが悪いというのも女である。政治の立体感覚が掴めずに、好き嫌いで判断する女性政治家もいる。俯瞰できないのだ。歴史の立体構造を見ずに、簡単に伝統文化を破壊するのも女。後ろ

を振り向かないのだ。石油危機で我先にトイレットペーパーを買いあさったのも女。それもこれも卑近な家族を守るための女の本能と想っていたら、最近では、愛人とともにわが子を虐待する女も目立つようになった。誠に女は仇である。孔子も苦虫を噛み潰して「女子と小人は養い難し」と言い放った。

もちろんサッチャーさんのような例外は、この世には必ず存在する。例外を認めないと、女には教育は必要ないという原理主義に陥る。戦争に明け暮れている国では、男の数が少ないので、男の原理が通用する。これは単純な経済学である。平和が長引くと男が増えるので、女も強くなる。反面、男は女々しくなる。環境ホルモンがこれに追い打ちをかける。すると、男女差別撤廃論が登場するが、これも一つの原理主義である。しかしその論者が、オリンピックの男女別を撤廃しろと叫んだ話は聞かない。男も女もない、親も子もない、教師も生徒もない、君も民もないという考えは、所詮日本には馴染まない。違いにこそ妙味を感じる粹な日本人が、辛うじて国体を維持しているのだ。

嗚呼、やまとなでしこのような粹な仇に巡り会いたい。